

都市先住民のネットワーク

ーフィリピン・マニラの事例からー

吉田 舞

1. はじめに

本稿は、フィリピン・マニラ(首都圏)を事例に、都市で生活する先住民のネットワークについて考察する。近年、経済のグローバル化により労働市場が変容し、都市で生活する先住民が増加している。地方でも雇用機会が増加しているが、先住民が仕事を得ることは容易でない。仕事に就けない先住民は、職を求めて都市へ出る¹⁾。また、フィリピン南部のミンダナオ(Mindanao)島では、政府軍とモロ・イスラム解放戦線(Moro Islamic Liberation Front)の武力衝突のため、生活の糧を失った先住民が親戚や知人を頼ってマニラに出る。

出稼ぎに出た平地民(多数派のクリスチャン・フィリピン)に関する先行研究には、人口移動の統計的分析や、移民やその家族についてのエスノグラフィがある(中西 2001、Nagasaka 2008など)。そこでは、平地民の都市移動の規模や様式、移住後の郷里との関係などが論じられている。都市へ移る平地民の多くは、郷里において農業や漁業で生計を立てていた人びとである。かれらの多くも、地方での武力衝突や生活の困窮が、都市移動のプッシュ要因になっている。この点で、地方出身の先住民と平地民は、類似した状況にある。

他方、先住民と平地民の間には、相違点もある。まず、先住民の多くは、平地民と比べて、貨幣経済に参入する時期が遅く、その生活様式への適応がより困難である。また、貨幣経済が浸透した後でも、現金収入を得られる機会は限られている²⁾(吉田 2012)。そして、先住民は、学歴や仕事の技術、言語力など、都市の労働で求められる能力や条件を満たさないまま、マニラの労働市場へ参入することになる。さらに、労働時間を自分で管理できる山仕事や漁業とは異なり、都市の労働では、多くの場合、時間や場所に拘束され、規則的に働かなければならない。このように、近代的な労働スタイルが身体化されていない先住民は、地方出身の平地民より限られた(下層)労働

に従事せざるをえない。本稿では、このような状況にある都市先住民のネットワークを、いくつかの範囲とレベルで分析し、それを通して、かれらの苛酷な仕事や生活の実態を明らかにする。

従来のエスニシティ研究では、ホスト社会の厳しい環境のなかで、移住マイノリティが再構築するアイデンティティや、エスニック・ネットワークの役割が強調されてきた。近年では、経済のグローバル化のなかで、「ポスト近代社会においても変わりなく持続する民族カテゴリーと、そのインフォーマルで共同体的なつながりの強さと濃さ」(岸 2008: 2)に関心が寄せられている。そして議論は、民族や共同体などの集团的アイデンティティやネットワークが再生・構築される条件について中心的に行われてきた。たしかに、マイノリティの人びとは、与えられた環境にただ受動的に適応しているわけではない。かれらは、ホスト社会において、ときにマジョリティに抵抗し、ときに状況認識、つまり、生活や労働に対する意味づけを変えて生きている。人びとは、日常生活のなかで多様な「戦略」を実践し、手を携えて生きている。しかし、マイノリティの人びとが構築するエスニックな「共同性」だけに着目すると、次の2つのことが見えにくくなる。

一つ、エスニック・マイノリティにとって、エスニシティ・ネットワークは、かれらの人間関係の一部でしかない。つまり、かれらは、エスニック・ネットワークであろうとなかろうと、苛酷な生活を生き抜くためには、どのような人間関係をも構築し、利用する(せざるをえない)。

二つ、エスニック・マイノリティを周縁化する平地社会の差別的構造である。松田素二は、人類学にみる「抵抗論」に対する批判として、「個々の主体のもつ能動性と創造性を、あまりにも過大に評価し支持することで、抵抗という視点は、かえって支配のシステムを不可視化してしまうばかりか、それに手を貸してしまった」(松田 1996: 10)と述べている。本稿で対象とする先住民も、この「支配のシステム」のなかで苛酷な生活を強いられている。そこでは、先住民の間の相互扶助さえ、部分的にしか機能していない(できていない)。また樋口直人は、従来のエスニシティ研究について、「表面的な観察からネットワークやコミュニティの形成を謳うのでは、その艇脈をなすダイナミズムや変差を見逃すことになる。ネットワークやコミュニティの形成原理や形成条件自体を説明対象とするような実証研究の蓄積が必要」(樋口 2005: 18)であると述べている。筆者の関心は、都市において周縁化された人びとのネットワークの考察を通じて、「支配のシステム」を可視化させることにある。どうしてかれらは、都市において多様なネットワークを形成している(させられている)のか。これに答えるため、本稿では、エスニック・

マイノリティとしての「共同体的」なネットワークと同時に、苛酷な仕事や生活のなかで形成される「弱い」ネットワークや、ネットワークからさえ排除される人びとについて考察する。

2. マニラの先住民

マニラで暮らす先住民の人口や労働についての資料は皆無に等しい。ゆえに、かれらの人口や生活実態を把握することは、容易でない。本稿では、ルソン (Luzon) 島中部のアエタ (Aeta) と、ミンダナオ島のバジャウ (Badjao)³⁾ を対象とする、マニラへの移動と労働という観点から、かれらは次のように分類される。まず、クリスマスの季節にマニラに出て、物乞いなどをして、目的を達成すると帰郷する循環型の出稼ぎ者 (circular migrant) がいる。このタイプでもっとも多いのが、バジャウである。ここには、出身地であるミンダナオ島から直接出てきた人びとだけでなく、ルセナ (Lucena) 州やパンパンガ (Pampanga) 州など、ルソン島の地方都市に移住した後に、マニラへ来たバジャウも含まれる。循環型出稼ぎ者の多くは、9月から3月の間、マニラに滞在し、地方都市へ戻っていく。出稼ぎでマニラに来たバジャウのおもな仕事は、物乞いである。そして、このような循環型の物乞いは、1990年代には、アエタにも多くみられた。かれらは、ピナトゥボ (Pinatubo) 山の周辺で暮らしていたが、1991年に火山が噴火したことで、生活基盤を失い、全国各地に散って避難生活を送っていた。しかし、避難先や再定住地での生活が不安定であったため、マニラに短期間やって来て、物乞いをして帰るアエタが増加した。しかし1990年代半ばには、アエタの物乞いが目立つようになり、「社会問題」となって、メディアで取り上げられるまでに及んだ (清水 2001: 205)。高速道路の入り口やバスターミナルなどでの物乞いが増加し、交通事故も多発するようになった。また、アエタの物乞いにはシンジゲートがついているという噂も、流れた。このような状況のなか、フィリピン政府は、物乞いをするアエタの取り締まりを強化して、かれらを再定住地に強制送還するようになった⁴⁾。その結果、近年では、マニラで物乞いをするアエタは減少した⁵⁾。他方で、2000年代に入ると、地方の工業化や観光開発が進み、アエタが現金収入を得ることのできる機会が増加した。しかしかれらは、現在でも、3ヶ月から1年単位の契約で、店番や子守、工場労働者として、マニラに出稼ぎに来ている。その多くは、地方の労働市場で雇用されなかった若者や単身者である。

次に、マニラの先住民には、生活基盤をマニラに移した長期滞在者がいる。現在、マニラには、5つのバジャウのコミュニティ (スクオッター) がある。

コミュニティに住んでいるとはいえ、そのなかには、部屋を借りたり、街路で段ボールや藁を敷いて暮らす、不安定な居住状態にある人が多い。ミンダナオの武力衝突は、1970年代に始まるが、それ以来、マニラで暮らす住民もいる。そのため、マニラで生まれた二世・三世も増加している。かれらは、物売り (vendor) や物乞い (beggar)、廃品回収 (scavenger) などのインフォーマルな仕事で生計を立てている。また、建設労働やサービス業の契約雇用など、不安定な収入の人が多い。マニラへ出て間もない人びとの多くは、知人の伝手で仕事に就く。そのようなネットワークや、仕事に必要な書類などの準備資金がない人は、街路で物乞いをすることになる。

この他、マニラには、ルソン島北部のコルディリエラ (Cordillera) 地方の先住民や、ミンダナオ島の先住民ではないムスリム (Muslim) の人びとなど、アエタやバジャウより、マニラで長く暮らすエスニック・グループがいる。かれらも、平地民とは異なる文化や生活習慣をもち、エスニック・コミュニティを形成している。また、都市のなかで差異化され、平地民による差別も経験している。しかしこれらの人びとは、エスニック・グループとしての権利を主張して、政治的なアクションをおこしている。かれらは、マニラでの土地の権利をめぐる裁判や、物売りが市場で営業許可を取る運動を行ってきた。若者や女性も、種々の権利を求めて、定期的に集会を開いたり、メディアに訴えた (渡邊 2011)。これに対して、アエタやバジャウは、いっそう厳しい生活条件にありながらも、声を上げることなく、「ひっそりと (Tahimik)」⁶⁾ 暮らしてきた。このような都市のバジャウについて、青山和佳は、「先住民としての主張も要求もしない、あるいはできない、二重に周縁化された人々である」(青山 2006: 12) と述べている。アエタの場合、地方では、先祖伝来の土地奪回をめざす運動を行っている。しかし都市では、かれらはバジャウと同様、「ひっそり」と暮らしている。そのため、かれらの存在が可視化されることはなく、政府からは軽んじられ、さらにNGOや政治団体からも、文化や価値観の違いを「尊重」という理由⁷⁾で、実質的には、放置されてきた。

こうして本稿では、マニラで暮らす先住民が置かれている状況に焦点を当てるため、調査対象をピナトゥポ・アエタと、ミンダナオ島から移住したバジャオに絞って、議論を進める⁸⁾。

本稿では、2011年8月と2012年8月に、マニラの先住民集住地⁹⁾および街路で行ったフィールドワークの資料を用いる。具体的には、スクオッターと街路において、参与観察とインタビュー調査を行った。インタビューでは、循環型／永住型の先住民の、仕事と生計に焦点を当てた。また、先住民の生

活実態やネットワークを把握するため、雇用主や近隣住民などの平地民からも聞き取りを行った。さらに、先住民の政策や援助については、社会福祉開発省 (Department of Social Welfare and Development, DSWD) や NGO 関係者、バランガイ (Barangay フィリピンの最小行政区) の役員に聞き取りを行った。調査言語は、タガログ (Tagalog) 語を基本とし、部族語の通訳が必要な場合は、先住民のなかから協力者を得た。また本稿では、調査対象地及び調査対象者はすべて仮名とする。

3. 都市先住民のネットワーク

次に、都市で暮らす先住民のネットワークについて、具体的にみていきたい。先住民の居住条件は、もっぱら労働に規定される。また、その労働・居住条件は、人びとの移動や、ネットワークの形成を規定する。

そのため、本稿では、労働と居住の観点から、都市で暮らす先住民を三つに分類する。第一に、雇用主の自宅や仕事場に住み込んで働く労働者である。これには、単身で地方からマニラに出て、数ヶ月契約で家事手伝いや店番、工場労働などで働く、短期の出稼者が多い。第二に、スクオッターで家を借り、または所有して、スクオッターの外にある職場に出かける通勤者、また、一つの部屋を数世帯で間借りして、スクオッターと街路を往復する人びとである。これには、マニラに生活基盤を移した人や、新しく親戚や友人を頼ってマニラに出た人が多い。第三に、街路で物乞いや廃品回収をして収入を得るホームレスである。かれらは、閉店後の店のシャッター前や空き地に段ボールや布、ビニールシートで簡易な寝床を作って寝る。これには、クリスマスの季節だけ家族連れでマニラに出る短期循環型の人や、長期間、街路で暮らす単身者が多い。

3. 1. 郷里とのつながり

短期出稼ぎで家事手伝いや工場労働、物乞いなどに従事する人は、収入を得て帰郷する人 (target migrant) である。そのため、これらの人びとは、仕送りをしたり、携帯電話 (メール機能を含む) で連絡することで、郷里の家族や親戚と頻繁に連絡をとっている。また、雇用主や知人を通じて新たな求人情報が入れば、家族や親族、知人に仕事を紹介することもある。

犬の世話と家事手伝いでマニラに来たアエタのジョッシュ (17歳、男性) とアンジー (17歳、女性) も、マニラで働いていた同郷人に仕事を紹介された。ジョッシュはマニラに出てから、数ヶ月に一度、両親が雇用主の自宅に電話して、連絡を取ってきた。アンジーは、プリペイド式の携帯電話を持

ち、携帯メールで頻繁に家族に近況報告をしている。クリスマスや誕生日には、5日ほどの休暇をもらい、一時帰省している。もともと二人とも、実家近くの観光リゾートで働くことを希望していたが、未成年という理由で仕事ももらえなかった。そのため、ジョッシュは2年間、アンジーは1年間の出稼ぎのつもりで、マニラに出てきた。

いつもボスに故郷の話をするんだ。自然がいっぱいあって、空気がきれいで、とてもいい所だよって。あなたが今度戻ってきたときは、もう実家に戻ってるかもね。ぜひ実家に遊びに来てよ。[Josh 2011年8月23日、雇用主の家で]

ジョッシュは、高校に通いながら仕事ができるという条件でマニラに来ていた。そして、高校を卒業したら郷里に戻り、実家から通える仕事に就きたいと考えていた。郷里では、両親が山仕事と洗濯婦で生計を賄っており、ジョッシュの学費を払う余裕はなかった。そのため、しばらく村を離れることにはなるが、高校通学付きの仕事は魅力的であった。彼の祖父は、村の長老の一人で、村人のために行政や外部者との交渉を行ってきた人物であった。叔父は、国家先住民族委員会(National Commission on Indigenous Peoples)の現地スタッフとして先住民関連の事業に携わっている。このような家庭環境で育ったジョッシュは、マニラでも自分は先住民であるという自覚をもっていた¹⁰⁾。そして、最後は、先祖伝来の土地へ戻りたいと願っていた。

このように、帰郷を予定した出稼ぎ労働者は、郷里と定期的に連絡を取ったり、休暇を取って実家に一時帰省するというように、郷里との間に、強い空間的・心理的な繋がりを保持している。

これに対して、スクオッターで暮らす先住民の多くは、既に生活基盤をマニラに移している。そこには、小さい頃に親に連れられてマニラへ出た1.5世代や、マニラで生まれた2世・3世がいる。かれらには、親や祖先の郷里を訪れたり、郷里にいる親族と話をしたことがない人が多い。また、郷里の家族や親戚もすでにマニラに移住している事例もあり、この場合は、移民一世であっても、郷里と疎遠になってしまっている。

ミンダナオで干し魚を作ってたの。でも、戦争が激しくなって、漁船を失くしてしまっただけ。20年以上も前にマニラに来て、家族みんなで物乞いを始めたの。でも、親は年取って、体も辛そうだったから、村に帰るように言ったの。私は物乞いで働いていけそうだったから、残ったわ。私は

物乞いして、旦那は働いてお金が貯まったら仕送りするからって。本当は私も帰りたかったんだけどね。毎日食べるのが精いっぱい、ミンダナオまでの旅費も貯まりっこないし。それで、また親がマニラに出てきたんだけど、あの時は、渡すお金さえなかった。こんな具合だから、村に帰りたくても帰れないの。[Jamila 2012年8月29日、M地区の街路にて]

ジャミーラ(30歳、女性)のように郷里に両親や親族がいる場合、仕送りしていなくても、連絡を取ろうと思えば連絡できる条件にある。彼女の両親も、ミンダナオに帰った後、何度かマニラに出てきていた。このように、スクオッターに長期に住む人の場合も、住み込み労働者や、短期の出稼ぎ者よりも、郷里の親戚と連絡を取り合う頻度が少ないものの、郷里との関係は断絶していないことが多い。

これに対して、街路で暮らす先住民には、家族や親戚との関係が断絶した単身者が多い。次は、街路で暮らして3年というイッサ(53歳、女性)の話である。

(イッサの郷里である)サンバレス(Zanbales)においてよ。いい所よ。B集落の出身なの。あなたのことは、いつでも歓迎するわ。(でも、その集落に行ってもあなたはいいですね。あなたが村に帰る時、いっしょに行ってもいいですか。)ああ、まあ、それはそうだわね。まあ、もう村には帰らないけど、あなたが行く機会があれば、行ったらいいわ。[Issa 2012年9月3日、S教会の炊き出し会場にて]

イッサは、マニラに来た当初は兄から小遣いをもらっていたが、その後は連絡が途切れている。イッサのようなホームレスは、住み込み労働者やスクオッター居住者のように、固定電話や携帯電話で郷里の家族や親戚に連絡を取る方法がない。ゆえに、郷里の者が彼女を探し出すことは困難であり、彼女が郷里に帰る以外は、郷里と連絡をとる方法はない。

このように、先住民と郷里との繋がりは、先住民が都市に出る事情によって異なる。また、マニラ你的生活環境や仕事の状態、滞在期間なども、繋がりの強弱に関わってくる。ジャミーラやイッサの場合、「経済的資本の調達にあたって重要な枠割を果たす」(樋口 2005: 7)という意味での、郷里との強いネットワークは、すでに弛緩している。それでも、ジョッシュやジャミーラ、イッサらは、郷里を賛美している。ジョッシュの場合、郷里の両親は山仕事と洗濯業で生計を立てており、彼の学費を払う余裕はなかった。アエタ

では、有力者であった祖父でも、山で自給自足の暮らしをしていたため、金銭の援助を期待することはできない。せいぜい洗濯やガーデニングの雑用を探して、小銭を稼ぐぐらいのことであった。学費の足しにと稼いだ収入も、すべて家族の食費となっていた。ジャミーラの場合も、郷里では内戦が続き、両親の暮らしは厳しく、援助を求めて娘を訪ねてきていた。イッサの場合は、郷里の家族や親族との間に事情があった。

兄は私がマニラに来た後も気をかけてくれたわ。兄の家で暮らせばって言うてくれてたわ。それ聞いて、みんなは「優しいお兄さんじゃない」って言うてたけどね。ホームレスになる前は、兄の家で暮らしたこともあったの。大きな家だったけどね。でも、昼間は一人きりでやることがない。とにかく暇なのよ。だから、私は、あんな所にいるより、ホームレスをやっていた方がいいわ。[Issa 2012年9月3日、S教会の炊き出し会場にて]

イッサの父親はアフリカ系アメリカ人で、スービック (Subic) 米海軍基地の兵士であった。その父と母親が別れた後、イッサはB集落で、母親と暮らしていた。母親が死んだ後、結婚も仕事もしていなかったイッサは、一人になり、兄夫婦の家に居候することになった。しかし、兄の家族が仕事に出かけると、イッサだけが家に残ることになった。家族が働くなか、イッサだけが「とにかく暇」な状況が続き、彼女は次第に家の中で、肩身が狭くなっていった。こうしてイッサは、兄の家を出た。しかし、街路の暮らしは厳しかった。炊き出し会場でイッサの診察をしている医師によると、彼女は白血病を患っており、病状も思わしくない。物売りをしようにも、足腰も弱くなって体力もないし、資金もない。しかしイッサは、通行人に金銭を乞う行為だけはしたくないという。そのため、火曜日から日曜日まで、毎日炊き出し会場を回り、命をつないでいる。炊き出しがない月曜日は、食事ができない。しかし彼女は、生死の狭間にいるような日々を送っていても、郷里とのつながりは完全に切れており、「村には帰らない」と断言する。

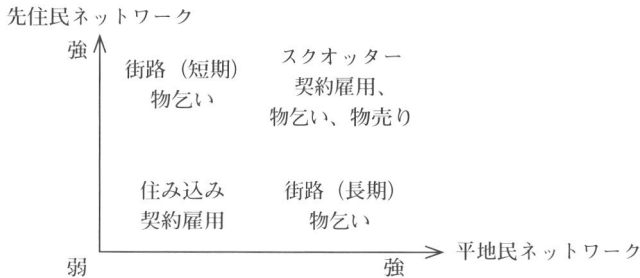
ジャミーラやイッサのように、一日一食が食べられるかどうかという厳しい生活を自ら選択している都市の先住民がいる。彼女らは、郷里に戻れない事情があったり、郷里の生活が苦しいことを知っていても、「いい所」だと、望郷への思いを語っている。彼女らは、「両者のつじつまを合わせることなく、併存させることによって、どん底の都市生活と困窮した農村生活をともに生き抜く創造力を生み出してきた」(松田 1996: 266) ののである。このように、郷里との心的な繋がりをもつ人びとの語りからも、都市先住民の生活の

厳しさを窺うことができる。

3.2. 先住民／平地民ネットワーク

都市で暮らす先住民は、仕事と住居の状態に応じて、さまざまなレベルのネットワークを構築している。図1は、本調査で確認された、マニラ先住民の住居・仕事とネットワークの関係を示したものである。

図1 先住民／平地民ネットワークと住居・労働の関係



したがって、図1はマニラで暮らすアエタとバジャウのすべてのネットワークを示すものではないが、これらを念頭に置いて、以下、労働と居住の観点から、先住民が築いているネットワークを考察する。

3.2.1. 住み込み労働者のネットワーク

住み込み労働者は、職場や雇用主の家に寝泊まりをしている。そのため、かれらがマニラでコミュニティを形成することは困難である。たとえば、ライアン(29歳、男性)は、食肉加工工場の一角に6か月間住み込みで働いていたが、労働時間は、朝10時から明け方の3時半までであった。このため、平日は睡眠時間も十分に取れず、休日は寝て過ごすか、そうでないときは、給料を実家に届けるために郷里に帰っていた。マニラでは外出することもなく、アエタの同僚と工場の上司と話をするくらいで、それ以外の人と話をすることはなかった。また、家事手伝いをする人の場合は、自由になる時間がさらに制限されており、外出や実家への帰宅が禁じられていることが多い。前掲のジョッシュも、2011年3月に、犬のブリーダーの手伝いとして雇われたが、外出を許されたことは一度もなかった。

近所で働いていたアンジー(親戚)のところへ行きたいって頼んでみたんだ。そしたら、「お前は遊びに来てるんじゃないんだぞ」って言われて、

許してもらえなかった。その後も「一度でいいから、行ってみたいんです」って言うてみたけど、だめだった。それからもう二度と行きたいとは言わなかったよ。[Josh 2012年3月20日、パンパンガ州の自宅にて]

雇用主の家では、朝から晩まで働き、土日の休暇もなかった。近所で働いていた親戚は、日曜日だけ休暇が取れたため、彼女の方から数回訪ねてきたが、ジョッシュからの訪問や電話は、すべて禁じられていた。また、実家から雇用主の家に電話があっても、アエタ語で会話することさえ禁止されていた。高校への通学についても、仕事が落ち着いたらマニラの高校へ転入の手続きをしたらいいと言われたが、転入手続きの書類を準備するための外出も許されなかった。その結果、ジョッシュは、マニラに滞在していた7ヶ月の間、他のアエタと話をするにはおろか、雇用主の家族以外の平地民とも、話をする機会はなかった。

3.2.2. スクオッターにみるネットワーク

あるNGOが2008年に調査した資料によれば、マニラのM地区で、バジャウは391世帯で、同地区の人口(1,045世帯、7,816人)の37.4%を占めた。同地区には、タウスグ(Tausug)、マラナオ(Maranao)、ヤカン(Yakan)など、その他のミンダナオ出身のムスリムや、地方出身の平地民が住んでいた(España 2008)。バジャウが同地区に最初に移住してきた年代は定かではない。しかしインタビューでは、10歳代にマニラに出てきた50歳代の男性や、20年以上前に出てきた30歳代の女性など、小さい頃に親といっしょにマニラに出てきた人が多くいた。また、マニラで生まれたという10代や20代、さらにその次に誕生した世代もいる。2007年にマニラのムスリム地区で大きな強制立ち退きが行われたときは、多くのバジャウが、M地区に移ってきた。新しくマニラにきた世帯や、平均家賃の1,500ペソを払う余裕がないバジャウは、6畳ほどの部屋を2~3家族で間借りし、部屋の使用を時間で区切ったりして暮らしている¹¹⁾。バジャウが集住する区画には、バラック仕様のモスクもあり、厳格ではないが、街路ごとにバジャウとその他の住民の棲み分けがみられる。

M地区のバジャウは、さまざまな仕事に就いており、「ちゃんとした務め¹²⁾」であっても、もっとも長くて一年程度の契約雇用が多い。建設・土木業は、プロジェクトが予定よりも早く終われば、契約期間内であっても、解雇を言い渡される。ファーストフード店のアルバイトでも、一日に長くて6時間しか働くことができず、時給が割増しになる夜間は働くことができない。かれ

らは、都合のよい労働力として、雇用主の意のままに使われている。M地区の周辺には、観光スポットや繁華街があり、両替商の呼び込みや受付、観光客相手の物売り、物乞いなどのインフォーマルな仕事がある。M地区で活動するNGOのアシスタントをして、生計を立てるバジャウもいる。これらの仕事も、一日の収入は80～200ペソ程度であり、マニラの最低賃金(非農業、サービス業で409ペソ、2012年6月、国家統計調整委員会Philippine National Statistical Coordination Board統計)を大きく下回っている。このような厳しい生計をしのぐため、人びとは、生活の中でさまざまな相互扶助のネットワークを利用している。

たとえば、バジャウの間では、頼母子講¹³⁾や食べ物の持ち寄りが行われている。頼母子講で集まった金は、病気や引越し、転職など、緊急時の出費に使われる。また、食べ物がなくて食事ができないとき、近所の人が食べ物を持ち寄って、街路で炭火を炊き、共同で調理をして食べることもある。それで腹が満たされることがなくとも、空腹はしのぐことができる。しかし、これも一時的な乗り切り方であり、大家族が、このような共同調理にたびたび預かることはむずかしい。次は、6人家族のジャミーラの話である。ジャミーラの夫は、聞き取りしたときは求職中で、すでに一ヶ月収入がなく、その間、近所で食べ物を分けてもらってしのいでいた。

上の子には可哀想なことをしたと思ってるわ。あの日は、おなか空いてるから、学校に行きたくないって言ってたの。それでも、無理やり行かせたの。学校へ行ったら、おなか空いてることなんか気にならなくなるわって。そしたら、勉強するどころか、バランガイの役員が「お母さん、あんたの娘が死にかけてるよ」って呼びにきたの。学校で倒れたって。すぐにその原因が分かったわ。あのときは、一ヶ月も食事を作らなくて、ろくに食べてなかったから。[Jamila 2012年8月28日、街路にて]

ジャミーラには4人の子どもがいた。週に2～3度、街路で物乞いをして、なんとか末っ子のミルク代(150ペソ)を稼いでいた。生活は苦しく、聞き取りをした頃も、はじめはあれこれ食べ物を持ち寄り、共同で調理をしていたが、次第に持ち寄る食べ物がなくなり、その状態が続いて、近所に頼りづらくなってしまった。近所とのネットワークが機能する間は、わずかでも食べ物を分けてもらうことができる。しかし、食べ物を分けてくれる人がいないときは、空腹を満たすことはできない。

食べ物を分けてくれる人なんていなかったよ。(そんなときは、どうするんですか) そんなときは寝るんだよ。寝るしかないさ。起きてたら腹が減るからね。[Bon 2012年8月28日、M地区の自宅にて]

同じく、4人の子どもがいるボン(31歳、男性)は、建設仕事を突然に解雇された。彼には、食べ物を分け合って食べるような近所のネットワークがないので、寝て空腹をごまかすしかなかった。郷里では、現金収入がまったくなくとも、畑の作物や山の果物、海では海藻や小魚などの、簡単に入手できる食べ物や、親族のネットワークにより、どうにか空腹をしのぐことはできた。しかしマニラでは、そのようなセーフティネットがなく、空腹をごまかすしかないような人びとが現れている。

他方で、フログ・フログガン(Hulog-Hulogan、分割払い)と呼ばれる、平地民とバジャウの相互扶助システムが存在する。このシステムは、平地民の家主がまとまった金が必要になったとき、所有する家や部屋を担保にして¹⁴⁾、バジャウから金を借りるというものである。たとえば、バジャウが平地民の家主に1万ペソを貸すと、家主がそれを分割で返済するが、バジャウは、完済するまでその家に住むことができる。しかし、家主が借金を完済すると、借家人のバジャウは住むことができなくなり、引越しを迫られることにもなる。バジャウは、頼母子講などの、バジャウの相互扶助システムを利用することで、一万ペソもの大金を家主に貸すことができる。このように、M地区にはバジャウと平地民の間のネットワークがあり、一見すると、たがいに助け合いながら「共生」しているようにもみえる。しかし、バジャウに対する平地民の差別は厳しい。

バジャウが、この地区のイメージを悪くしてるんだよ。連中は、外でひったくりをしてこの地区へ逃げ込んでくるのよ。連中は、ここの路地をよく知ってるからね、ここへ入ると、追っ手から逃げることできるの。だれも彼もとは言わないけど、ひったくりの8割方は、バジャウの子どもよね。親も親よね。子どもにそんなことさせて、いくら儲けてるんだって話よ。そのおかげで、ここのバランガイのイメージが悪くなってるのよ。テレビ番組の取材も来ないし、チャリティー番組も来ない。ここのイメージはすごく悪いからね。[Edna 2012年8月25日、自宅にて]

M地区で、バジャウと長く暮らしている平地民の間でも、このような「バジャウは犯罪者」というイメージが、広がっている。NGO関係者の話によ

れば、たしかに、バジャウの若者による犯罪は問題になっているが、路地に逃げ込むひったくりの多くは、M地区のバジャウではなく、よそ者だという。また、バジャウの頼母子講のシステムも、平地民にはあまり知られておらず、「バジャウは大金をもっている」、「バジャウはすぐに金が準備できる」といった風説も広まっている。ここからも、同地区でのバジャウと平地民の心理的な棲み分けを窺うことができる。

3.3.3. 街路にみるネットワーク

街路で暮らす先住民、つまり、先住民のホームレスも、先住民と平地民のネットワークを形成している。先住民のホームレスには、短期の出稼ぎ者が多い。かれらは、街路で集住して暮らしており、したがって、住み込み労働者よりも強いネットワークを形成している（ただしそれは、マニラで新たに形成されるネットワークというより、ともに出てきた親戚や知人とのネットワークという性格が強い）。写真は、バジャウが暮らす空き地の風景である。かれらは、クリスマスの際に物乞いをする目的でマニラに出て来た。先にマニラへ出て、スクオッターなどに住むバジャウとのネットワークがないとき、かれらは、このように街路や空き地で暮らすことになる。その場所は、フィリピン国有鉄道 (Philippine National Railroad) の線路沿いや空き地など、さまざまである。マニラに来て間もない先住民ホームレスは、街路でのネットワークをもたない。そのため、鉄道警察やマニラ首都圏開発庁 (Metro Manila Development Authority, MMDA)、社会福祉開発省 (前掲DSWD) の取り締まり情報を持たないことが多く、夜間や早朝に検挙され、郷里に強制送還されることもある。マニラの中心部から車で一時間のパラニャケ (Parañaque) 市で物乞いをしているバジャウの女性も、取り締まりが怖くてマニラには行きたくないという。



マニラでは警察やなんかの取り締まりがあるから怖い。捕まったら遠くに連れて行か

年始年末に物乞いの目的でマニラに短期の出稼ぎに来たバジャウのテント。マニラに滞在中は、ここで共同生活を送っている。[撮影：Melona Daclan 2011年 2月6日]

れるらしいの。その日の売り上げはみんな没収されるし、何も渡す物がなかったら、どこか遠くに連れて行かれて、車から降ろされるらしいの。あとは勝手にしろってね。そうになったら自力でマニラへ帰ってこないといけなくなるわね。そんなの、本当に怖い。[Ismah 2011年8月17日、パラニャケ市の街路にて]

ここで言う取り締まりとは、MMDAやDSWDと、バラングイの役員が行う「救出・保護(rescue)」および「一斉検挙(clearance)」のことを言う。検挙されると、まず、一時保護施設に送られ、およそ一週間後に郷里へ強制送還される¹⁵⁾。取り締まりは、先住民だけをターゲットにして行われるわけではないが、取り締まりの関係者によると、バジャウは服装や言語などですぐ見分けられるという。これに対して、長期に街路で暮らす人は、平地民との間にさまざまな人間関係を形成している。たとえば、行政の一斉取り締まりのとき、バラングイの役員が応援要員として駆り出されることがあるが、普段見かけるバジャウをわざと見逃したりする。

一昨日も夜に警察の取り締まりが入るって聞いたから、僕も取り締まりに出たんだ。路上で寝てたバジャウの夫婦を捕まえたんだけど、まだ生まれたばかりの子どもを抱えてて、可哀想になってさ。母親も助けてくださいってすごく言うし。一時保護施設に入れられたら数週間は出てこれないからね。子どももずっと泣いていて、仕方ないから今回だけ見逃すから、逃げろって言ったの。でも、ここでは定期的に取り締りがあるから、それでまた捕まったり、逃げられなかったり、また路上に戻ってきて捕まったら、もう知らないよって言っておいた。しばらくしてトイレから戻ると、もう逃げていた。役員の相方に、お前が捕まえたバジャウはどこに行ったんだって聞かれて、「あー、ごめん、トイレに行ってたから、監視できなかった」って言っておいたよ。[バラングイ関係者Mさん 2012年8月25日、自宅にて]

また、閉店後の商店のシャッター前で寝たり、ショッピング・モールの入り口で物乞いをする先住民を、ガードマンが黙認したりする。飲食店では、先住民が、ガードや店員と顔見知りになって、トイレを使わせてもらったり、飲料水や売れ残りの食べ物をもらうこともある。このように、長期の先住民ホームレスには、短期で循環型の人よりも、平地民ホームレスとのネットワークが多くみられる。そこでは、取り締まりや、安全に寝ることができる

場所の情報、炊き出しの情報、飲料水がもらえる飲食店の情報などが、先住民と平地民の間で共有される。

はじめはなんにも分かんなかったよ。炊き出しのことだって知らなかったし。でも、他の人たちが教えてくれたの。ご飯くれるところがあるっていうから、私もついて行ったの。みんな平地民よ。マニラに出てから、他のアエタには会ったことがないわ。 [Issa 2012年9月 2日、E教会での炊き出し会場にて]

イッサは、3年前に田舎から出てきたが、家庭の事情のため、家族や親戚とは縁が切れている。マニラでも、他のアエタとの接触は一切ない。しかし、先住民ネットワークをまったく持たないイッサであるが、平地民との間では、さまざまなネットワークを持っている。彼女は、毎日、マニラ市内の炊き出し会場を一人で回って生活をしのいでいるが、寝るときだけは、身の安全のために、同年代の平地民の女性、30歳代のシングルマザーとその2人の子どもの5人と一緒に寝ている。他のホームレス女性も、イッサと同じように、日中は炊き出しや物乞いなどで別々に行動している。また、この仲間内で食べ物や金を分け合うことは、ほとんどないという¹⁶⁾。このように、彼女らは夜に通行人や同じホームレスの男性による嫌がらせや暴力から身を守る目的のために、夜だけ一緒に過ごしている。

イッサは、炊き出し会場で仕事をしている。炊き出し会場では、炊き出しの参加者が、配給前のミサや説教の時間に喧嘩をしていないか、教会にふさわしくない行動をしていないかを監視する。このように、主催者が、ホームレス同士で監視¹⁷⁾させたり、管理させたりすることがある。ホームレスのボランティアは、会場では「リーダー」と呼ばれており、ミサや説教に定期的に参加し、主催者の信用を得ることができれば、会場でのリーダー役を任される。そして、報酬として、食べ物を優先して確保したり、2人分の食べ物をもらったりする。

ホームレス向けの炊



炊き出し会場で、食べ物配布の前に神父の説教を聞く人びと [撮影 John Lagman 2012年9月2日]

き出しは、その多くが宗教団体によって行われている。そのため主催者は、ホームレスにただ食べ物を与えるのではなく、それぞれの神への「崇拜」を求め、食べ物が配られる前に、カトリックの神父やプロテスタントの牧師によるミサや説教が、1時間から3時間ほど行われる¹⁸⁾。

イッサは、朝はカトリック教会の炊き出しに参加し、昼はそのままプロテスタントの集会に参加し、夜はインド人が夜食を提供する寺へ移動する。ここでは、それぞれの賛美歌を歌うだけではなく、時には、牧師と話をして泣き崩れたり、トランス状態になったり、気を失った(ふり)したりする。

ミサや集会なんかで、神父や牧師からいろんなことを教えてもらえるよ。でもね、そこで教えてもらったことは、右の耳から入って、全部左の耳から出ていってる。(笑)だって、食べるためには必要なことだもの。歌えと言われれば歌うし、踊れと言われれば踊る。説教の間、座ってるだけで食べ物がもらえるなら、いくらでも座ってるわよ。[Issa 2012年9月2日、E教会での炊き出し会場にて]

このように、食べ物や医療サービス、衣服などの援助を受け取るためには、信じていない神に祈りを捧げ、主催者に忠実で、学生などのボランティアや、事業の支援者に対してフレンドリーな態度を装わなければならない。このような空間で演出される人間関係は、親族やエスニックの間の紐帯のように強く、持続的なものではなく、すぐにでも切れる一時的なものである¹⁹⁾。この「弱い紐帯の強み」(Granovetter 1973)も、路上生活を生き抜くために欠かせない人間関係の一つである。

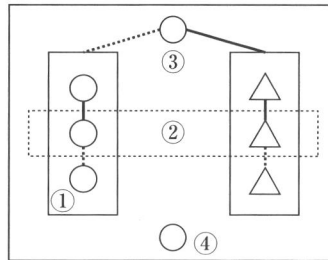
このようなネットワークや人間関係をもたないホームレスもいる。炊き出し会場に入らず、会場の外で物乞いをする人、空腹感を麻痺させるために、ラグビー(覚醒効果のある接着剤)を常用したり、精神疾患を患い、他のホームレスから距離を置かれている人などが、それである。かれらは、街路において、先住民としてのエスニックな共同性さえ喪失し、ホームレスのネットワークから孤立し、労働も、消費もできない人びとである。そしてかれらは、「廃棄された人々」(Bauman 2001=2008: 109)として、最下層の平地民とともにアンダークラス(underclass)の群に合流していく。

4. ネットワークから見えるもの

本稿では、マニラに出た先住民と郷里の繋がり、マニラでの先住民ネットワーク、先住民と平地民の間のネットワーク、さらに、一時的に形成される

「弱い」ネットワークについて、フィールドワークの事例に基づいて考察した。その概要は図2の通りである。

図2 都市先住民のネットワーク



- 先住民 △平地民
 実線：強いつながり 点線：弱いつながり
 ①先住民同士のネットワーク
 ②先住民—平地民ネットワーク
 ③先住民ネットワークから離れ、
 平地民とネットワークをもつ先住民
 ④ネットワークから距離を置く先住民

都市に出た先住民は、厳しい暮らしのなか、緊密なネットワークを形成し、物的な相互扶助を行って、「貧困を共有」しようとする(①)。しかし、都市においては、貧しい生活をしのぐのは、あくまで個人の責任とされる(貧困の分有)。スクオッターのM地区やホームレスの生活でみられたように、先住民にとって、集団ぐるみの協働的な相互扶助はもとより、近親者がたがいに食べ物を分け合う、個人レベルの相互扶助さえ困難になっている(このため、①の先住民間のつながりにさえ、点線が混在している)。このような境遇のもと、先住民とも平地民とも、持続的なネットワークを持たず、一時的な人間関係のなかで暮らす人(②)、さらには、あらゆるネットワークから距離を置く人がいる(④)。イッサは、先住民とのつながりは持っていない。しかし、炊き出し会場や街路生活で、平地民との間にさまざまな範囲とレベルのネットワークを持っている(③)。身を守るために平地民とともに夜を過ごし、昼は、食べるために炊き出し会場を回っている。また、炊き出しの主催者やボランティアとの間に(一時的な)信頼関係を築き、みずからボランティアになることで、わずかな金や物品をもらっている。ただし彼女は、豊富な生活資源のなかから、平地民とのネットワークを積極的に選択しているわけではない。彼女は、郷里の家族とのネットワークが切れ、重い病気を抱えた高齢のホームレスである。彼女が都市で生き抜くためには、平地民とのネットワークを選択せざるを得なかった。そこに、都市で懸命に生き

抜く最下層の先住民の苛酷で孤独な暮らしを窺うことができる。

本稿では、先住民のさまざまなネットワークの分析を通して、かれらが都市で置かれている状態について考察した。先住民は一方で、都市の平地社会において〈再共同化〉(re-communalization)している。他方で、先住民としての共同性さえ解体しかねない〈個別化〉(individualization)の道を辿っている。都市の先住民が、厳しい境遇を緊密な相互扶助により乗り越えるという側面だけでは、もはやかれらの生活の全体を見ることはできない。かれらの再共同化と個別化の矛盾する(集団的な)動向を見てはじめて、都市の先住民の行方を予見することができる。それを分析するための理論的枠組みを開拓することが、本稿の後に続く課題となる。

[追記] 本稿は、2012年科学研究費 基盤研究(B) 課題番号24330145「グローバル・シティにおけるホームレスの労働・居住をめぐる国際比較研究」(代表 山口恵子)の成果の一部である。

[注]

- 1) たとえば、パンパンガ(Pampanga)州のアエタの集落地近辺では、観光開発が進み、アエタの雇用機会も増えた(吉田 2012)。しかし、仕事に就くためには、18歳以上という年齢制限や識字能力、コミュニケーション能力などが必要となる。条件に合わない若年者や非識字者らは、生計を立てるために集落外に通いの仕事に出るか、都市へ出稼ぎに出るかしかない。
- 2) 本稿が対象とするピナトゥボ・アエタ(Pinatubo Aeta)は、1991年のピナトゥボ山の噴火以降、急激に平地社会との距離を縮めた。ある村では、アエタと同じ集落に住んでいた平地民には、噴火前から雑貨屋などの商売を行う人や、海外出稼ぎに出る人がいた。アエタも、集落で商売をしようと奮起し、2000年に生活協同組合を設立したが、それは失敗に終わった。
- 3) バジャウとは、「サマ(Sama)語を話す人々」のなかでも「過去に家船に住んだ経験のある集団」、つまり「海サマ」を示す(青山 2006: 25)。本稿が対象にする人びとの多くは、サンボアンガ州で漁師をしていた海サマの人びとである。フィリピン社会では「バジャウは物乞いをする貧者」というイメージが強く、マニラでも、かれらは、最底辺にある人の代名詞のように思われている。したがって、サマの人びとは、都市で生きるために、バジャウでなくても(もともと陸で暮していた「陸サマ」でも)、バジャウを名乗ることがある(青山 2006: 25)。
- 4) マニラで、物乞いに対する取り締まりが厳しくなり、物乞いをするアエタは徐々に減少しているが、クリスマスの季節に現れる物乞いについては、2000年以降も社会問題化されている(Philippine Daily Inquirer 2006, 2008, 2011)。
- 5) アエタの物乞いが減少した理由として、もう一つ、火山噴火直後にあった、かれらに対する「哀れな被災者」というイメージが弱くなったこともある。2000年に入ると、平地民の間

では、「ピナツボが噴火して10年も経つのに、まだ生活が復活しないのか」というように、物乞いに対するネガティブなまなざしが強くなっていった。

- 6) 「私もマニラで生まれたからもう長いんだけどね、これまで私たちバジャウはマニラでひっそりと生きてきたわ。いろいろ問題にされたり、問題に巻き込まれたりするのが嫌なのよ。」
[Lara, 2012年8月23日]
- 7) 都市貧民の支援をしているNGOでも、先住民を平地民と同じ活動に加えることで、先住民の文化や価値観が失われてしまう危険があるという理由で、都市の先住民を組織化しないものがある。
- 8) ただし、アエタとバジャウを、先住民のなかのマイノリティとして一括りにすることには問題もある。本稿では、平地社会に住む先住民に焦点を当てるために、アエタとバジャウの違いに踏み込むことを控えた。しかし、マニラに出るまでの歴史的背景や、社会的背景、文化や価値観、身体的な条件の違いなども、ネットワークの形成に深く関わっている。
- 9) NGO作成の統計によると、2008年にM地区で暮らすバジャウは391世帯で、全体(1,045世帯、7,816人)の37.4%を占めた(España 2008)。
- 10) 「一度、市場で『ヘイ、ジョー』って声をかけられたことがあるんだ。ボス(雇用主)は、僕が黒人に間違われたって、他の人に冗談っぽく話すんだけどね。僕は、別になんとも思わなかったよ。『違いますよ、バンパンガ州から来たアエタですよ』って答えたんだけ。だって本当のことだから」[Josh 2011年8月23日 雇用主の家で]。フィリピンには、アフリカ系の人びとに対する蔑視があるが、アエタに対する蔑視の方がより強い。そのため雇用主は、ジョッシュが人種として「格上げされた」というニュアンスを込めて「冗談っぽく」話した。マニラ出身者でないことを説明するため、出身地を言うことはあるが、ジョッシュは、あえてその場で自分が「アエタ」であることを相手に伝えた。ここから、ジョッシュが、強いエスニック・アイデンティティをもっていることが分かる。
- 11) たとえば、家族Aが8時～20時まで部屋を使い、その後、家族Bが20時から翌日の朝8時まで使うという具合である。かれらの多くは、部屋を使えない時間帯には街路で過ごす。かれらは、いわば「半ホームレス」である。
- 12) 「娘は大学を続けられなかったけど、それでもちゃんとした会社に入れて、ラッキーだったわ」[Elena 2012年8月26日 自宅にて]。学費が払えず、大学2年で退学したエレナ(50代、女性)の娘は、契約社員としてファーストフード店で働いているが、一ヶ月の収入は3,000ペソほどである。
- 13) 頼母子講では、参加メンバーが毎月一定額を支払い、自分の担当月には、積立金を受け取ることができる。M地区のNGOスタッフの話によると、一人当たり月々30ペソを払い、担当月には一人当たり3,000ペソほど受け取るという。ただし、参加人数など、システムの詳細は不明である。
- 14) M地区は、1930年代に、公有地に平地民が住み始め、その後、居住権をめぐって住民組織

とマニラ市との間で訴訟の裁判が行われている。裁判は現在も続いているが、フォーマルな居住権や地権とは別に、住民の間で家屋・土地の売買や賃貸が行われている。

- 15) 行政関係者の話によると、2012年9月に、クリスマス・シーズンに向けてマニラに来たバジャウの11世帯36人が、シェルターに「保護」されていた。
- 16) 街路で物乞いをするバジャウの女性への聞き取りでも、同様な話が出た。「一度もらったものは他の人には分けない。いくらお腹がいっぱいでも、もらっておくの。ほしいなら自分でもらえばいいわ。自分がもらったものは自分のもの。私たちはこうなのよ」[Ismah 2011年8月17日、モールの入り口にて]。
- 17) このように炊き出し会場では、ホームレスに炊き出し参加者を監視したり、参加者リストを作ったり、献金を集める役割を任せたりする。
- 18) そのため、イスラム教を信仰するバジャウや、独自の創造神を信仰するアエタのホームレスのなかには、他の神への祈りを強制する炊き出しに強い抵抗を感じる人もいる。また、炊き出しのおかずに豚肉を使う料理が多いため、ムスリムのバジャウのホームレスにとっては、炊き出しに参加しにくいもう一つの理由になっている。このように、行政や民間によるホームレスへの支援事業には、問題点も多くみられるが、本稿の目的から逸れるため、これについては別稿に譲る。
- 19) ただし、これは炊き出しに参加するホームレスだけではなく、主催者についても同じである。R教会の主催者は、教会の近くで飲食店を経営しているが、炊き出しと日常を区別しているという。「たまに炊き出しの参加者が私の職場に『食べるものがないんです』ってくることがあるの。私はそういうのが嫌なの。私は、個人的なコミットメントとして炊き出し活動に関わってるの。だから、仕事の時は仕事。炊き出しのある日はちゃんと参加者に耳を傾けるようにしてる。だから、そういうときは、職場には絶対に来てはだめだって伝えて、帰ってもらってるわ。」[Jasmin 2012年9月2日、R教会内にて]

【参考文献】

- 青山和佳, 2006, 『貧困の民族誌——フィリピン・ダバオ市のサマの生活』東京大学出版会。
- Bauman, Zygmunt, 2001, *The Individualized Society*, Cambridge : Polity Press. (=2008、澤井敦他訳『個人化社会』青弓社。)
- España, J., Lagaran, M., and von Arx, M. 2010, An Assessment of Problems Encountered by Different Non-Government Organization., MSSW Group, Asian Social Institute (unpublished)
- Granovetter, Mark S., 1973, “The Strength of Weak Tie”, *American Journal of Sociology*, Vol.78, pp. 1360-1380.
- 樋口直人, 2005, 「国際移民と社会的ネットワークの再編成——滞日ブラジル人企業家を事例として」『徳島大学社会科学研究』第18号, 02: 1-22頁。
- 岸政彦, 2008, 「アイデンティティとネットワーク——ある沖縄人女性の生活史と文化実践から」

『人権問題研究』大阪市立大学学術情報総合センター, 8:41-58頁.

松田素二, 1996, 『都市を飼い慣らす——アフリカの都市人類学』, 河出書房新社.

Nagasaka, Itaru, 2008, “The Contemporary Rural-Urban Linkages: A Case of the Philippines”,
Toh Goda ed., *Utabanization and Formation of Ethnicity in Southeast Asia*. Quezon City: New
Day Publishers. pp. 77-99.

中西徹, 2001, 「都市化と貧困」大阪市大経済研究所・中西徹編『アジアの大都市(4)マニラ』,
日本評論社.

Philippine Daily Inquirer 2006, “Aetas sell, beg to live”

(http://business.inquirer.net/money/topstories/view/20061015-26785/Aetas_sell_beg_to_live, 2012.10.12).

——, 2008, “DSWD tells Quezon City to prepare for influx of Aeta beggars” (<http://newsinfo.inquirer.net/breakingnews/metro/view/20080901-158071/DSWD-tells-Quezon-City-to-prepare-for-influx-of-Aeta-beggars>, 2012.10.12).

——, 2011, “LGUs told to keep Yuletide beggars off urban areas”

(<http://newsinfo.inquirer.net/80033/lgus-told-to-keep-yuletide-beggars-off-urban-areas>, 2012.10.12).

Republic of the Philippines Department of Labor and Employment, National Wages and
Productivity Commission, 2012, “Summary of daily minimum wage rates per wage order, by
region Non-Agriculture (1989 - 2012)”,

(http://www.nwpc.dole.gov.ph/pages/statistics/stat_wage%20rates1989-present_non-agri.html,
2012.06.26).

清水展, 2001, 『噴火のこだま——ピナトゥポ・アエタの被災と新生をめぐる文化・開発・NGO』
九州大学出版会.

吉田舞, 2012, 「先住民の労働にみる差異化と全体的底辺化—ピナトゥポ・アエタと地方労働市場」
『理論と動態』5: 94-111頁.

【映像資料】

Kara David, 2008, “Biyaheng Sigmura”, *The Best Of i-Witness Vol.4*, GMA Network, Manila,
Philippines.

(よしだ・まい 首都大学東京)